

新・刊・紹・介

宮城まり子著：『ねむの木の子どもたち』

この5月、国は法にもとづく児童福祉施設体系の中に新たに第2の肢体不自由児施設ともいふべき「肢体不自由児養護施設」を正式に制度化した。これは従来の medical rehabilitation を行う療育病院である肢体不自由児施設ではなく、医療措置を必要としない（またはその限度にきた）肢体不自由児で、むしろ養護的な措置が必要な子どもたちを収容する施設である。

今回、この肢体不自由児養護施設の認可第1号となったのが5年前に宮城まり子さんが自らの手でつくり、運営をされて来た「ねむの木学園」であり、そのほか今年から新たに山口、大阪、函館にも公立の施設が発足している。

ところで、宮城さんは長い間女優としての多忙なスケジュールの生活の中で、折にふれて全国各地の心身障害児を慰問され、福祉の谷間にとり残された子どもたち、とくに脳性マヒ児との触れ合いをとおして生れた止むに止まれぬ心情と決断から5年前にこの「ねむの木学園」を創立された。

このたび発刊された「ねむの木の子どもたち」の中で宮城さんは、「ねむの木学園ができてから、ただただ夢中の5年目に、政府は正式に肢体不自由児養護施設という制度をつくって下さった」とつつましく述べてお

られる。しかしこの5年という長い間宮城さんは「ねむの木をお役所になんとか理解してもらうために何度も頭を下げ、提出する書類づくりがうまく書けずに叱られながら、さらにわかってもらえない両親のいるもどかしさに耐えつつ」ただひたすらに国に訴え、説得し、国をうごかし、5年目にしようやく日の目をみたのである。まさに苦闘の連続であったに違いない。これは私が聞きおよんでいるかつての島田療育園や秋津療育園、そして古くは「しいのみ学園」が歩まれた創設当時の苦闘と全く同じであり、パイオニアとしての民間施設の宿命的苦闘であったと言って過言ではあるまい。心から敬意と声援を送りたい。

その苦闘の中にも宮城さんは入園して来た子どもたち、親ごさんたち、加えて園をまもる職員一人一人に対し、澄んだ情愛と対話を重ねつつ園を支えて来られた。本文の中にはそれが実に素直に書きつづられている。むつかしい理屈をぬぎにしたひたむきの実践の記録である。そして“人の生命”を大切にしようとする著者の理念、願いが読後にすっきりと脳裡にスタンプされた。誠にさわやかに、「ねむの木学園」の着実な発展と宮城さんの今後のご活躍を心から祈ります。

（宮城県整肢拓桃園長 高橋 孝文）

（ごま書房刊・480円）